



ひなゆめファンの止まり木
バレンタイン合同本 2016

目次

(著者名は敬称略)

それは想い人より愛しくて (ハヤテのごとく)	
() 想いよ届け③+1	3
著者：どうぶん	
カカオいろクツキング (ハヤテ+きんモザ)	
著者：ロッキー・ラックーン	10
垣根を越えて	
(寄宿学校のジュリエット)	
著者：双剣士	20
バレンタイン様が見てる	
(オリジナル)	
著者：比翼連理	30
著者あとがき	50
編集後記・奥付	52

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における特別企画「バレンタイン合同本2016」に投稿していただいた有志の皆様による作品集です。

公開サイト：ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

バレンタイン合同本2016の趣旨説明と受付ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/valentine2016/patio.cgi>

それは想い人より愛しくて

ㄱ 想いよ届け㊸+1

著者：どうふん

あの電話が前触れもなく掛かってきた時、「来るべきものが来た」、そう思った。

本来であれば、ハヤテ君が私に電話を掛けてくるなんて、折り返し以外ありえない。

夏休み、皆でハヤテ君のお兄さんを探しに海へ行つたとき、私の親友にして恋敵のヒナさんが体調を崩して入院した。

いつまでも、全員がその場に残留するわけにもいかず、ハヤテ君一人をヒナさんの看病に残ってもらうことになった。

ナギちゃんが反対していたが、その気持ちはわかる。

（このシチュエーションで何も起こらないわけじゃないよね・・・）

そう思ったが、ヒナさんの想いと苦勞を知っている私は、自分に止める権利はないと思った。

ヒナさんは、ハヤテ君のために幾度となく危険な目に遭っ

ている。文字通り体を張って、ハヤテ君を助けているのだ。それも多くはハヤテ君に知られることなく。

今回だって、体調をおかしくした原因は、ハヤテ君と一緒に夜の無人島に渡り、幽霊の群れに襲われたことにある。到底私には真似できない。というより役に立てない。

恋敵とはいうものの、それほどの想いを持ち、私なんかより遥かに素敵な女性であるヒナさんには、奇跡でも起こらない限り、勝ち目はない・・・はずなただけ。

ヒナさんの唯一の弱点、いや唯二か。恋愛に関しては臆病で、弱気ですぐにネガティブに陥ってしまう。信じがたいほどだ。昔、何か衝撃的な体験でもしたのだろうか。

はつきり言って、ヒナさんを蹴落とすチャンスは何度かあった。

それで私の恋が成就するわけでもないだろうが、少なくともあれほど強力な恋のライバルがいなくなれば、チャンスが2〜3割くらいは増えるんじゃないかな。

それなのに、誤解を繰り返して落ち込んでいるヒナさんを、私はその都度励まし、恋愛戦線に引き戻した。今回だってハヤテ君にヒナさんの面倒を見るよう後押しした。

なぜだろう。

はつきり言えることは、あのヒナさんの落ち込んだ顔を見ていると、胸が締め付けられる。笑顔のヒナさんでいてほしい。あの時だってヒナさんのやつれた顔を見るとそう思った。

そして、その結果がこの電話なのかな。私は震える手で携帯を取った。

「西沢さん、ヒナギクさんが大分良くなりました。もうすぐ退院できますよ」

「そ、そう。良かったね」

それだけではないだろう。そんなことならヒナさんが掛けてくるはずだ

「それで、西沢さん。はつきりと伝えておかなければいけないことがあります。本当は面と向かってきちつと話がしたいのですが、今遠くにいますので勘弁して下さい」

その後、どんな会話をしたのかは覚えていない。覚悟はしていたが、やはりショックで記憶は消し飛んでしまった。

ただ、私が最後に発したセリフだけは覚えている。

「ヒナさんを泣かせたら私が承知しないよ・・・」

退院したヒナさんは、私（だけじゃないだろうけど）に罪悪感みたいなものを持っていた。しかし、羨みはしても妬むとか憎むとか、そんな気にはなれなかった。

むしろ遠慮がちに滲み出てくる幸せそうな笑顔を見ているとネガティブな感情なんか吹き飛んでしまう。

おかしいけど私まで笑顔になって、これで良かったんだ、という気になる。

やはりヒナさんは本当に素敵だ。

そして、私ははつきりとハヤテ君に振られたんだ。残念だし悔しいけど、何となくすつきりとした気がする。私も新しい恋を見つげなきゃ。ヒナさんが羨むくらいの素敵男性を、いつかきつと・・・

ここまで考えて、得体の知れない違和感を感じた。

何だろう、この形容しがたい気持ちは。

何かおかしいこと考えたっけ？

おっと、バイトの時間だ。

夏休みの無理が祟って、今私は金欠病に陥っている。

今日はハロウィーンの日曜日。

モンスターに仮装して街頭でお菓子を配ります。まあ、こんな可愛い子なんだから魔女の係かな。

・・・結局私はフランケンシュタインに扮することになった。皆はかわいい、と言ってくれるけど、顔はお面を被って見えないんだよね。

「あー、フランケンだ」

小さな子たちが私を指して寄ってくる。街中でモンスターの配るお菓子の減るペースは私が一番早い。私も結構な人氣者じゃないかな。顔は見えないけど。

おや、と思った。

「ヒナさん」

すぐ近くのブティックショップの店頭ヒナさんがいた。私に気付かず、まあ気付かないだろうな。楽しそうにあれこれ手に取って眺めている。

これは運命の出会いじゃないかな。こんなチャンスは滅多

にない。フランケン歩がヒナさんを驚かせてやろう。

私はさりげなくお菓子を配りながらそつとヒナさんに近づいた。

もちろん、ヒナさんは私に気付かない。ほくそ笑みながらヒナさんに声を掛けようとしたとき、後ろから声がした。

「ヒナギクさん」

ざくりとした。あの声は。

振り向いたヒナさんの表情が一変し、ハヤテ君へ駆けよつた。

花畑の花が一斉に開いたような、満面の笑顔と共に。

胸がズキンと痛んだ。あんなヒナさんの笑顔、見たことがない。

私はヒナさんの親友と思っていたけど、恋人には遠く及ばないんだ。

え、私は何を驚いているのかな？当たり前のことじゃないかな？

「フランケン、おかし、くれよー」

「あ、ああ、ごめん」その子にキャンディーを配って振り

向くと、二人の後ろ姿は人波に消えようとしていた。

この時私ははつきりとわかった。私は、ヒナさんじゃなくて、あの笑顔を独り占めしているハヤテ君にヤキモチを焼いているんだ。
まさか、これ、同性愛？ま・・・まさかね。

ムラサキノヤカタを出て家に戻った後も、私はヒナさんと時々会って一緒に食事したり、買い物に行ったり楽しい時間を過ごしている。

だけど物足りない。ヒナさんはあの満面の笑顔を私に向けてくれることはない。無理なのかな、それは。

バレンタインデーも終わろうとしている。

ヒナさんに助けられて、ハヤテ君にチョコを渡したのは去年のことだった。

そして今年も、ヒナさんとハヤテ君のデートを尻目に（見てないけど）ハロウィーン、クリスマスに続き、バイトに励んでいた。

金欠病から抜け切れていないから仕方ない・・・というのは言い訳で、バレンタイン用の彼氏というか、チョコを上げる相手を見出すことができなかったのだ。

私はもう一人の女の子と組んで駅前の出店でチョコを売っていた。

今日まで5日間、休みなしでバイトするのは、この子と私だけだったらしい。

さすがにお客さんもまばらになってきた。

「こーんなかわいい子が二人、バレンタインにバイトに励んでいるなんてねえ」

可愛くて、良く働くが、大人しくて無口な子だ。話しかけても、反応が鈍い。

「ええ、西沢さんはそうですね。まあ私は仕方ないですよ。家が貧乏なもので」

何となくハヤテ君を思い出してしまった。

「君みたいな子。男の子だけど知ってたなあ。去年のバレンタインは、パーティに誘ったんだけど、一人でバイク便のバイトに励んでいたなあ。（あ、あれはクリスマスだったっけ。まあ、いいか）。でも、今年は素敵な彼女もできたことだし、今頃デートしてるんだろうなあ」

「あら、それは羨ましい。私も好きな人はいたんですけど」
お、これは盛り上がるチャンス、かな。

「え、え。どんな人？私ね、去年チョコを上げた男の子に
この夏正式にふられたんだ。（えへへ・・・バイク便やつ
てた子なんだけど）まあライバルが手ごわすぎてね・・・」

「私ですね・・・一目ぼれした相手にその場で振られち
やっただけで・・・」

「それ、一つのドラマじゃないかな。どんなイケメン？」

「う：ん、イケメンってわけじゃないですけど、優しさが
全身から滲み出ているような感じで。」

あの時私は町でバイトしていて試飲コーヒーを配ってい
たんです。道で躓いて転びそうになって。たまたま通りが
かったその人が支えてくれて、転ばずにすんだんですけど、
盆の上のコーヒーは全部ひっくり返っちゃって。その人の
服や手に熱いコーヒーを掛けちゃったんですよ」

「あら・・・、それは大変だったね」

「で、謝ろうとしたんですけど、その人が先に『大丈夫で
すか？ヤケドしてませんか』って」

な、何となくハヤテ君に似てるような・・・。

「とにかく、服を拭いて、クリーニング代くらいは弁償し
ないと、って思ったんですけど、そんなこと必要ありませ

ん。あなたが一生懸命謝ってコーヒーを拭ってくれたんで
すからそれで十分です、って言い切られちゃったんです」

「そ、それで、一目ぼれしちゃったわけなの・・・かな」

「はい」そりやまた、きつぱりと。

「連絡先とか名前とか聞かなかったのかな」

「聞きたかったんですけど。その人の彼女が来たので聞き
そびれちゃいました」

「そ、その彼女っていうのは・・・」

「すごく綺麗で優しそうな人でした。桃色の髪をして女の
私でも見とれてしまうくらい笑顔が素敵で・・・」

これは間違いない・・・かな。

「でも、その子はスタイルは・・・というかプロポーション
は今一つだったんじゃないの」

一体何を口走っているのかな、私は。ただ、ついつい目が
その子の胸に行った。はつきり言って「巨乳」というサイ
ズだな、これは。

私ですら敵いそうにない。ましてヒナさんでは・・・。

「スタイルがどうこうじゃなくて・・・あのスマイルに参
らない男の人はいないと思いますよ」

別に男の人に限ったことじゃないんだよ、それは・・・。

もう一つ疑念が湧いた。

「ところで、ヒナさん……じゃなくてその彼女さんは、彼氏が君みたいに可愛い子にいろいろと世話してもらっているのを見て怒ったりしていなかったのかな？」

「え、そんなことないですよ。あら、どうしたの、って感じでやってきて、『それは災難ね。ヤケドしなかった？』最後は私にも『大丈夫？気にしないでね』って声を掛けてくれて、あとは二人で手をつないで仲良く歩いていきましたよ」

これは本物だ……。いやこの二人がヒナさんとハヤテ君だということではなく、二人の仲が。

そんなに余裕たっぷりなんだ。あのヒナさんが……。こういうのを安定期というのかな？いやあれは妊婦の場合だ。

しかし言わんとすることは基本的に一緒のはず。

こんな調子じゃ、もう私がヒナさんの恋愛相談に乗って上げることもない……。のかな。

「おかしいですよね、振られたっていうのも。それだけのことなんですけど」

その子は屈託なく笑っていた。

「で、でもさ、私だって同じなんだし。っていうか、その目ぼれした相手は私と一緒にだね、間違いなく」

「え、そうなんですか……。それは凄く偶然ですね」

「全く罪作りだよね、あの青い髪の執事さんは。でも私だつて負けちゃいけない。来年こそはリベンジするぞー」雄叫びを上げる私に通行人が驚いている。そういえばバイトの最中だった。しかし驚いたことにその子は私とお喋りをしながら手を全く休めていなかったみたいで、その子の前にばかりお客さんが集まっている。

「ご、ごめんね、一人で働かせちゃって。すみません、次にお待ちの方、こちらにもどうぞー」

(やっとなづいたの?) その子が笑いを堪えているのが見える。

その笑顔が何とも言えず可愛くて、初めて会った頃のヒナさんを思い出した。

この日私には、二人目の親友ができた。牧瀬恋葉ちゃん。

「歩さん」「恋葉ちゃん」と名前でも呼び合うことも約束した。

同じ男の子を好きになった二人。

その意味ではヒナさんと似ているけど、恋敵じゃない。も

うなれない。

その代わり、どちらが先に恋人を作るか、そんな競争を約束した。

ヒナさん、浮気じゃないからね。

それに私がヒナさん離れしないと、ヒナさんが心配だよね。

ふと、思った。私に恋人ができて幸せになったら、その時はヒナさんが私にあの笑顔・・・ほどじゃなくても、まだ見せた事のない素敵なお顔を向けてくれるんじゃないかな。

いや、違うんだ、きつと。

これはヒナさんをお願いするようなことじゃない。

私が、最高の笑顔を、私だけの誰かに届けなきゃいけないんだ。

私は久しぶりに晴れ晴れした気持ちで足取りも軽く帰路についた。

ポケットには、恋葉ちゃんからもらったチョコが入ってる。店長さんが、残ったものから好きなものを一つ持って帰っ

ていいよ、と言ってくれた。

二人で、相手に上げるチョコを選ぶことにした。その中身は帰ってからの楽しみ。

カカオいろクツキング

(ハヤテ+きんいろモザイク)

著者…ロッキー・ラックーン

「まえがき」

今回も「ハヤテ」以外からのキャラクターが登場しますので、ご紹介します。

【きんいろモザイク】

原悠衣先生による異文化交流系4コマ漫画。主人公の大宮忍が中学生の頃にホームステイした家のイギリス人少女、アリスが高校生になって日本に留学に来た所から物語が始まる。ハヤテキャラとの交流は第7回合同本「さくらいろ無修正」をご参照ください。(ダイレクトマーケットイン
グ

【アリス・カータレット】

今回の主人公。生粋のイギリス人だが、日本好きが高じて日本に留学に来る。ホームステイ先の同級生である少女、

大宮忍(おみやしのぶ)の事が大好き。ヒナギクとはハイキングで会った時(第7回合同本参照)からの友達である。見た目は小学生と間違われてもおかしくない程の大きさだが、4月生まれの高校二年生なので、この話に出てくるキャラクターの中では実は最年長である。

【九条カレン】

アリスのイギリスでの幼馴染。父親が日本人、母親がイギリス人のハーフ。アリスを追いかけて日本に留学に来たが、アリスと一緒にのクラスになった事は無い。食べるのが大好き。クラスの人気者なので、バレンタインは皆からチョコを貰って食べるのに夢中になるタイプ。アリスちゃん(縦ロールの方)のマブダチで、アリスちゃんと一緒にハヤテとヒナギクを弄る役回りという設定。

※毎度の事ながらハヤテとヒナギクの関係は、小説板で連載中の「しあわせの花」の設定に準じております。それではどうぞ！

こんにちは、アリス・カータレットです。

もうすぐバレンタイン！日本では、女の子が好きな人にチョコレートをあげる日になってるんだよね。

私もシノにチョコを作ってあげたいんだけど、お料理はちよつと苦手なの。誰か得意な人で、バレンタインにチョコを作りそうな人に教えてもらいたいんだけどなあ。

【カカオいろクッキング】

「それで、私に電話してくれたという訳ね」

「うん！」

私がチョコ作りのレクチャーをお願いしたのはヒナ。去年の夏休みにキャンプに行ったときに偶然知り合っただ。あの白皇学院で生徒会長をしてる凄い人なんだ。

「ヒナならお料理も上手だし、バレンタインはハヤテに何

か作るんでしょ？」

「ええ、そのつもりよ。なかなか良い人選だと思うわ」

才色兼備、文武両道だけでなく料理上手で優しいヒナは、今回の私の悩みに一番の適任者だね。

「えへへ。ではヒナ先生よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします」

今日はヒナの家にお邪魔してチョコ作りのお勉強。ゼーつたいシノに喜んでもらうんだから！頑張るぞおー！

「で、私はなんで呼ばれたデース？」

と、気合を入れている私に話しかけてきたのはカレン。食いしんぼうで、バレンタインにチョコを作る女の子から一番遠い存在だと思っただけど：

「カレンさんは私の遊び相手ですわ。それに、出来上がったら私たちで味見をしてあげる事になってますの」

「Oh！それはとってもナイスアイデアデース！アリスもヒナも、頑張ってくださいデース！」

カレンの質問に答えてくれたのは、アリス。アリスと言つても私じゃなくて、ヒナとその恋人のハヤテとの子供（色々複雑な事情があるみたいだけどあんまりよく知らない）の女の子。この子も食いしんぼうで、いつもカレンと二人で美味しそうにお菓子を食べているんだ。

今日は一人でヒナに教わりに来ようと思つてただけで、来る前にアリスから電話で「カレンも連れて来て欲しい」つて言われて、シノには今日の事を内緒にする約束で連れてきたの。

「では遊びに行く前に、アリスさん。作るチョコレートは初級・中級・上級・超上級のどのチョコレートが良いでしょうか？」

「え!? 四つもあるの?」

アリスが真剣な表情で話しかけて来た。うーん、お菓子作りには自信が無いけど…やっぱりシノにあげるチョコだから気合を入れて作りたいよね。うん!

「超上級がいいなー。シノにあげるチョコだし」

「流石はアリスさんですわ! 超上級はまさに貴女にしか

作れない世界で一つのチョコレートですわよ!」

「そうなんだー! どんなのどんなの?」

誇らしげなアリスの言葉と表情に、私の期待も高まっていく。いったいどんなチョコなんだろう?

「まずはチョコレートの原料となるカカオ豆を作る農地の契約からですわ! 日本の気候ではカカオの生育に適しませんから、この資料にあるガーナの10ヘクタールの土地が良いかと…」

「ファッ!」

アリスはそれはもう得意げに、なぜか英語で書かれている契約書を差し出してきた。私の方は呆気に取られてしまつて、変な声が出ちゃつたよ。

「ちよつアリス! 『チョコを作る農地から』つてどこのアイドルグループの話よ! もう、時間は限られてるんだから早く出でつた出でつた!」

「ちえつ、ですわ。行きましょカレンさん」

「オーケー! ヒナのお部屋で『Festa』。アリスとあんなコトやこんなコトするデーす!」

おかしな方向に話が進んでしまいそうだったのをヒナが止めてくれた。口を「3」の形にして部屋を出て行くアリス。それにしても、なんで外国の土地の契約書なんて持ってたんだろう？…って、気にしたらダメなのかもね。

「まあ、あつちのアリスの言ってた超上級は冗談として：どんなチョコが作りたいのかしら？」

「うーん、お菓子作りはママとスコーンを作ってたくらいだからよく分からないの」

スコーンを作ると言っても、ほとんどママがやってくれて、私やカレンは型を取ったりお皿を準備したりと、お手伝いくらいしかやった事が無いんだ…。

「スコーン：流石は英国淑女ね。じゃあ差し当たり、さつきアリスが言ってた初級と中級をやってみましようか」

「どんなチョコなの？」

この四つの分類は、この話を読んでる皆も疑問に思うよね。私の質問に、ヒナは咳払いをして話し始めた。

「初級は、市販のミルクチョコレートを湯煎で溶かして、好きなトッピングと一緒に好きな形にして固めるの。手軽で味も安定する方法よ」

「それともういわゆる『手作りチョコ』だよね。中級だとうなるの？」

「中級は『お菓子作り』になるわ。ケーキでもクッキーでも、チョコの入ったお菓子に挑戦するの。アリスの腕前と愛情が、受け取る人に強く伝わると思うわよ」

「へー！私に出来るかな？…ちなみに上級は？」

「もう『チョコそのものをイチから作っちゃう』の。カカオ豆って普通はそんな手軽に手に入らないらしいんだけど、アリスが『本物の手作りチョコが食べたい』って言い出して豆を取り寄せたから、ウチにたくさんあるのよ。結構難しく、私もバレンタイン本番まで練習している所なの」

「すごい！ヒナがいちから作ったチョコだなんてハヤテが貰ったら絶対喜ぶと思うよ！」

チョコを本当にカカオ豆から作るだなんて、流石はヒナだと思った。私もシノのためだったら何でも出来る自信があるけど、いきなりそこまではちよっと無理だよお…。

「そ、そうかしら？」

「うん！絶対そうだよ」

上級はヒナでさえ練習が必要なレベルだからちよつと無理だよね…。今回は無理だけど、いつか作れるくらい料理を出来るように頑張ろう！

「オホン！で、アリス。どれがいいかしら？」

「初級の手作りチョコと…出来たら中級でケーキの作り方も教えて欲しいな」

「ええ、お安い御用よ！じゃあ始めましょう」

「うん！」

ヒナが教えてくれるんだから本当に心強いよ。自分もハヤテのために頑張らなきゃいけないのに、本当にママみたいに優しい。

よおし、シノのために頑張っちゃおうよ!!

「ところで、アリスは忍さんのどんな所が好きなの？」

ケーキの生地をオーブンに入れて焼き上げている間の休憩時間、ヒナは唐突に聞いてきた。私にシノの話をしてくれると、エンジン全開になっちゃうからね。

「うーん、全部！シノがホームステイに来てくれた事で私の人生が大きく変わったの。日本が大好きになったのもシノのおかげだし、ヒナとこうして友達になれたのもシノのおかげなんだ！だから私はシノのためだったらなんでもしてあげられるの」

そう、今の私の人生はシノを中心に動いている。シノとケンカしたり、シノと仲良くするカレンに焼きもち焼いたり、グレて不良の真似をしたりした事もあったけど、どんな経験も一つでも欠けてしまうと今のシノとの関係はありえなかったと思うの。

「そうなんだ。すごい愛情を感じるわ」

「えへ。じゃあヒナはハヤテのどんな所が好きなの？」



私の話をしたんだから、ヒナの話を聞かせてもらってもおかしくないよね？いつもアリスと一緒にいるとママみたいに優しいヒナだけど、ハヤテと二人でいる時はどんな感じなんだろう？

「えーと…アリスやカレンには内緒よ？」

「うん！」

ちよつと恥ずかしそうに私に耳打ちするヒナ。今まで見た事が無い緩んだ表情なのが印象的だと思った。

「最初はね、一目惚れだったの」

「えっ！そうなの!？」

クールな印象のヒナが一目惚れっていう想像はしてなかった。すつごく意外。

「うん。でもそこから、優しい所や、頼りになる所や、ちよつと抜けてて放っておけない所とか、ハヤテのいろんな所を知って、もつともつと好きになったわ」

「わあー！恋する乙女だね！もうキスとかしちやったの？」

私たちのグループじゃ男の子の話なんて出ないから「恋バナ」には憧れてたんだ。思わず深くまでツッコみたくなっちゃった。でもこれくらい「ジョシコーサー」なら普通だよ？

「えっ!？」

「だからキスとか…」

「お、お子様には早い話よ！」

「ええ？私4月生まれだからヒナより1歳近くお姉さんだよ！プン」

シノからもよく「見た目小学生」って言われるけど、私は5人の中でも一番のお姉さんだし、ヒナも3月生まれだから妹みたいなものなんだよ！なんでみんな子供扱いするの！

チーン

「あ！ケーキ焼けたみたいね。早く開けましょ！」

「うーん、上手くごまかされた気がする…」

まあ、いつか。とりあえず今はシノのためのケーキが一番だよ。ヒナのキスの話は今度また聞いちやうんだから！

「キレイに焼けたわね。美味しそう！」

「ホントだ！これならきつとシノも喜んでくれるよ！」

ヒナの教えてくれた通りに私が作ったチョコケーキ。デコレーションはまだだけど、このままでも全然美味しく食べられちゃうくらい。本当に美味しそう！

「うーん、とつてもいいニオイデース！」

「これなら味にも期待出来そうですわね」

焼きあがったケーキの匂いに誘われてお騒がせコンビも登場。ホントにカレンもアリスも食いしん坊なんだから…。

「じゃあ飾りつけが出来たら、味見がてら皆でお茶にしましょうか」

「ヒナに賛成デース！早く食べたいデース!!」

「じゃあカレンさん、お皿とフォークの用意をお願いしますわ」

「がってんだー、デース！」

美味しいケーキに皆のテンションも最高潮！きつとシノにあげる時もこんな風に笑顔が弾けてくれるんだと思う。楽しみだなあ。



待ちに待ったお茶の時間。色んなものを作った中で、一番最初に皆が口をつけたのが私の作ったケーキだった。

「アリスさん、とつても美味しいですわ」

「うん、これなら忍さんも喜んでくれると思うわよ」

「アリス！今度シノに作るついでに私にも作って下さいデース！」

皆が笑顔で私に感想をくれる。なんだかすつごく嬉しい

い！頑張った甲斐があったよお。

「皆ありがとう！本番でもシノに喜んで貰えるように頑張るね！ヒナ、本当にありがとう！」

「私は作り方を教えてあげただけよ。美味しく出来たのは、アリスが忍さんの事を想って頑張ったからだと思うわよ」

「そうかな？えへへ」

ヒナは優しい上にすつごく謙虚で、私の理想とする「やまとなでしこ」そのものだと思う。本当に憧れちゃうよお。

バレンタイン本番も、ヒナが教えてくれた事をしっかり思い出して美味しいケーキを作って、シノに喜んで貰えたらしいなあ。きつと頑張るからね!!

「それでは、次はヒナの作ったチョコを頂きましようか」

「いただきます、デス！」

「あつ、私もいただきます！」

アリスの言葉をきっかけに、皆が一斉にヒナの作ったチョコプレートに手を伸ばす。カカオ豆から作ったそのチョコは、今まで口にした事がないくらい舌に優しくとろけてい

った。

「おいしい！流石はヒナ！」

「とーっても delicious デース！」

「ん、まあまあ及第点ですわ。しかしながら、ヒナの力はこんなものじゃないですわよね？」

アリスの辛口評価は別として、ハヤテのために一生懸命勉強したヒナの愛情がチョコから伝わって来たよ。

「ヒナからこーんな美味しいチョコが貰えるハヤテは幸せ者デース！きつとお札に、キスとかチュウとか接吻とかしてくれるデース！」

「ちよつカレン!？」

カレンの言葉に、ヒナの表情が凍りつく。アレ？なんかカレンが物知り顔なんだけどどーゆー事なのかな？

「Lift」。アリスに色々写真を見せて貰いました。ヒナとハヤテのラヴラヴなシーンがテンコモリでしたー！」

「!ですわ。私の『あいぱっど・みに』には何でも入ってますわよ」

さつき二人が遊びに行っていた時に、ヒナとハヤテのラブな感じの写真とかを見てたのかな？ やっぱりキスはしてたんだ！ 私にも見せて欲しかったなあ。

「いいなーカレン。私も見たいなあ。」

「もちろん、アリスさんにも見せるために持って来てありますわよ。」

「やったー！」

アリスがフリフリのスカートの中からタブレットを取り出す（なんでスカートの中なんだろう？）。待ち受け画面になっている、ヒナとハヤテに挟まれて嬉しそうにするアリスの写真からは、これから見せてもらう写真の過激さは想像する事が出来なかった。

「うわあ、ヒナったら大胆！」

「ハヤテの方も野獣のような眼光を放ってますネー！」

「もういつそ殺して…」

「恥ずかしがる事はありませんわよ、ヒナ」

あのクールなヒナと、優しいハヤテがこんな情熱的な…

人間って恋心ひとつでこんなに豹変するんだって初めて知った。それにしてもこんな刺激的なシーンをアリスはどうやって抑えたのかちよつと不思議だなあ。



「ヒナ、今日はありがとう！ おかげでシノに美味しいのを作ってあげられそうだよ」

「いいえー。バレンタイン本番も頑張ってるね！」

「うん！」

帰り際の玄関。すっかりお邪魔してしまった私とカレンは、ヒナとアリスの二人にお礼と挨拶をした。

「アリスさん、ひとつだけアドバイスを…」

「ん、なあに？」

いつになく真剣な表情のアリス。何か大事なアドバイスなのかな…？

「ヒナが貴女に教えたのは調理技術にしか過ぎません。バレンタインで大切なのは、何よりも愛情ですわ。貴女が忍さんの事を想って作った物であれば、どんなものでも必ず喜んでくれますわよ。迷った時はまず落ち着いて、忍さんの顔を頭に思い浮かべると良いですわ」

【おわり】

この子は本当に私より10歳も年下なのかなあ？ヒナとハヤテにもこういうアドバイスをしてるって聞いた事があるし、本当に凄い子なんだと思った。

「うん、それだけは誰にも負けないよ！」

「ワーオ、『ECHO』アリスは恋愛のセンスイデース！」

「ウフフ、では頑張って下さいね。カレンさん、今度は貴女も作ってみてはいかがですか？」

「私は食べる専門デース」

「もう、カレンったら太っちゃうよ！」

「HAHAHAHA!!」

もうすぐバレンタイン。チョコレートに乗せた想いがシノに届いたら、きっと何よりも嬉しい気持ちで満たされるんだと思う。

頑張って、きっと大好きなシノに心のこもったチョコレ

ートを贈ってあげたいと心に誓うのでした。

垣根を越えて

(寄宿学校のジュリエット)

著者…双剣士

東の東和国と、西のウエスト公国。海をはさんで向かい合う二つの国は、不倶戴天の宿敵同士である。幾星霜にもわたる戦争や遺恨や因縁が積み重なり、行政府はもちろん民衆や社会風土に至るまで互いの名を聞けば唾を吐きかけるほどに憎しみあっている。とはいえ嫌っているからと言つて国ごと引つ越すわけにも行かぬため、両国は緊張と衝突と妥協を繰り返しつつ数百年にわたつて向かい合つてきたのであつた。

そんなわずかな弛緩の時期に「このままではいけない」と考えた両国政府は、両国の中間に位置するダリア島に『ダリア学園』を設立し、国の未来を担う若者たちを交流させることを目論んだ。諍いの種を無くすことは出来ずとも減らすことは出来るはず。固定観念や宿怨などに縛られない若人たちを同じ学校で学ばせることで少しずつでも絆や信頼感を育むことができれば……国の将来を憂う老人たちがそう期待を寄せるのは無理からぬことだっただ

ろう。

あいつらと顔を合わせるなんて真つ平御免、という国民の反発を和らげるために、ダリア学園には国一番の名門校という格式が与えられ、王族や財閥子弟を半強制的に通わせる制度が設けられた。教室以外でも若者たちが互いを知る機会を増やすよう、完全寄宿舎制の小中高一貫教育を行う体勢が整えられた。若者向け強制収容所という悪名を振り払うべく、それぞれの国の寄宿舎には国旗が掲げられ、各学年ごと選ばれたリーダーの元に誇りを持つて秩序だった学園生活を営める環境も作られた。

だが老人たちは失念していた……政権や両国関係はいずれ代わること、そして誇りを持った若者たちほど大人の意向に染まりやすいと言ふことを。両国融和を狙いとしたはずのダリア学園ではいつしか、東和国専用『黒犬の寮』とウエスト公国専用『白猫の寮』の生徒同士が派閥に別れて互いを敵視し、教員たちの目の届かぬところで喧嘩と悪口をぶつけ合うのが恒例行事、いや伝統にして崇高な責務と認識されるようになっていた。なまじ国旗と名誉と秩序を与えたことが完全に裏目に出てしまい、寮生たちの争いは国家間の代理戦争とも言うべき『引くに引けない戦い』

の様相を呈するまでになってしまっていた。

そして、その戦いを先導するのが各学年のリーダーの役割である。国の威信を背負って戦うリーダーには、同胞の中でも飛び抜けた才覚と人望、そして臆することなく最前線に立つて敵陣に切り込む度胸と実力が求められる。敵に敗れることはおろか弱腰になることすら許されない、当然ながら敵国の者とは友情どころか馴れ合いすら成立しない……それがダリア学園に暮らす者たちの『掟』であり『宿命』なのであった。

*
*

とはいえ同じ学園である以上、寮以外の施設の多くは共用である。そんな施設の一つである礼拝堂の懺悔室の中で、一組のカップルが人目を忍んで肩を寄せ合っていた。

「こうして隠れて会うのにもだいぶ慣れたよな、ペルシア」
「気を緩めないで。このことが誰かにバレたら私たち破滅なのよ」

少年の名は犬塚露壬雄（いぬづか ろみお）、少女の名はジュリエット・ペルシア。彼らはそれぞれ黒犬寮と白猫寮の高等部一年生リーダーであり、公の場では何度も一騎打ちをしている宿敵同士であるが……裏ではこうして密

会を重ねている恋人同士である。彼らの名前が某有名戯曲のカップルの名前そのまんまであることは原作者の趣味だが、取り巻く環境はより過酷と言えよう。なにせ家同士ではなく国同士が敵なのだ。

「まあ何とかなるって。言ったら、世界を変えてやるって」
「言うだけで変わるなら苦労はしないわよ。で、何？ 大事な用って」

犬塚からの熱烈告白で成立したカップルだけに、基本的に犬塚は夢見がちで樂觀主義、ペルシアはクールで現実主義な物言いをする。とはいえ交際を重ねるうちに、学年リーダーとしての表の顔とは異なる互いの仕草や表情を目の当たりにした若い二人の仲は、つきあって数ヶ月経った今でもアクセルべた踏みの急加速中なのであった。

「いや、その……明日、アレだろ？ もしかして期待しても良いのかなって」

「アレって何？」

「何って……ウエストには無いのか？ バレンタインデー」

「何それ？」

「だからさ……」

照れ混じりの犬塚の説明を聞かされたペルシアは、呆れたように目の前の彼氏を見下ろした。恋人に向けるには失

礼な態度だが、金髪の超絶美少女がやるとサマになってしまいうから困る。

「女の子から告白って……ずいぶんとはしたくない風習があるのね、東和国って」

「はしたないってか……そりゃ東和だつて男からの告白が普通だけどな、年に一度の貴重な例外の日って言うか、そのお……」

「野蛮国の東和では例外もありでしょうけど、ウエストにはそんなの無いわよ。ましてや伯爵家の私がそんなことをするなんて考えられないわ。お父様に知られたら一発退学のうえ地下牢に幽閉されちゃうでしょう」

「そ、そんな大げさな……」

犬塚にしてみれば長年憧れていた少女とついに恋仲になって、初めて迎える一大イベント。通常のデートと違って男の側で段取りすることが出来ないだけに、期待と不安を半々に抱えながら問いかけてみた訳なのだが……これほど強烈な拒絶に会うとは思ってもみないことだった。

《ペルシアが退学になったんじゃ元も子もない、あきらめるしかないのか……でも食べたかったなあ、ペルシアのくれるチョコ》

乙女以上にロマンスストなところのある犬塚が大きな背中を丸めてがつくりと肩を落とす。するとそんな彼の表

情を下から覗き込んだペルシアの口から、思いがけない言葉が飛び出した。

「……なんてね。いいわよ、作ってあげる」

「え？」

「あり得ないおつきあいをしてる私たちですもの、いまさら常識ぶつても仕方ないわよね。あなたの落ち込む顔なんて見たくないし」

「……ペルシア！」

感極まって抱きつこうとする犬塚の肩を押し留めながら、ペルシアは慌てて言い繕うのだった。

「あ、あの、でも、私、お料理ヘタだからね！ 変な味でも落胆しないでね！」

「なんだっていいさ！ ペルシアがくれるんなら」

「……そこまでハードル下げられると複雑な気分なんだけど」

*
*

そして翌日。バレンタインデー当日の朝である。浮かれ気分を隠しきれずに黒犬寮の個室のドアを開けた犬塚の前に、一人の少女が立っていた。

「おはよう犬塚！ バレンタインの義理チョコだゾ♥」

「わっ……あ、ああ、蓮季か」

彼女の名は蓮季（はすき）。犬塚の黒犬寮での同志であり、数少ない親友である。大きな黒い瞳をくりくりと回して犬塚の表情をうかがう様子は、まるで主人を慕う子犬のよう。彼女もまた犬塚のことを『一番の親友』と称しているが、それが犬塚の言葉と同じ意味でないことは犬塚を除く黒犬寮の全員が知っている。

「ほらほら、特大の義理チョコなんだゾ！ ありがたく受け取るがいいんだゾ」

「あ、ああ……サンキュな、蓮季」

初等部で知り合ってから以来、毎年のように行われる特大義理チョコの贈呈儀式。だが犬塚の表情に去年までとは違う落胆の色がかすかに混じったことを、つきあいの長い蓮季は鋭敏に見抜いた。

「……ペルシアじゃなくてガツカリしたのか？」

「ちよ、蓮季、おま、こんなところで……」

「分かってる。聞いているやつは誰もいないゾ」

犬塚とペルシアの仲を知っているのは、黒犬寮の中では蓮季だけ。親友の蓮季にだけは隠し事をしたくないという犬塚の言い分に、親友以上の感情を抱いていた蓮季は痛く傷ついたので……犬塚が破滅する引き金を引くわけにも行かず、渋々ながら犬塚とペルシアの仲を隠し通すこと

に同意したのであった。誰も居ないところで皮肉をぶつけるくらい可愛いものだと言えよう。

「大丈夫だって。蓮季のチョコは義理チョコだって前から言ってるだろ？ 本命チョコは本命からもらえば良いんだゾ」

「……蓮季」

「そんな顔すんなって。義理チョコ受け取ったくらいで浮気にはならないから、素直に受け取ってればいいんだゾ」
立ち尽くす犬塚に笑顔でそう言うと、蓮季は表情を隠すように背中を向けてスキップで数歩犬塚から離れた。そして再び振り返った蓮季の顔には、いつもと同じ満面の笑みが浮かんでいた。

「あつ、でもでも、今日最初に犬塚にチョコ渡したのは蓮季だからな？ しつかり覚えておくんだゾ♥」

ここで時を少しさかのぼる。

犬塚と分かれて白猫寮に戻った後、さつそくチョコレートの材料を買いに行こうとしたペルシアは、途中でスコットに呼び止められた。

「ペルシア様！ 聞きましたか、黒犬の連中が気もそぞろ

になつて明日のイベントのことを」

「明日のイベント？」

内心の動揺を押し隠してクールに返事をするペルシア。同じ貴族出身のスコットはペルシアに恩を感じており、ペルシアのためなら火の中の水の中とばかりに忠臣のごとく後を付いてくる少年である。ペルシアにとつては背中を預けるほどには頼りにできない同級生だが、学年リーダーという立場上あまり無下にするわけにも行かない。

「そうです！ 黒犬では明日はバレンタインデーとかいう、野蛮で下等な風習がある日らしくてですね。好きな女の子から男の方にチョコを渡してもらえるとあって、その幸運にあずかれるのは誰かと男どもは皆浮き足立っているらしいですよ」

「……へえ、そうなの」

一番浮き足立っているのは向こうの学年リーダーその人です、と言うわけにも行かず生返事をするペルシア。そんな彼女の気も知らずスコットは畳みかける。

「これはチャンスです！ やつらが身内の色事にかまけて腑抜けになる明日こそ、我ら白猫との格の違いを見せつける絶好のチャンス！ 今夜のうちに体勢を整えて、明日さっそく攻め込みましょう！」

「……止めときましよう」

「は？」

意外な返答に啞然とするスコットに対して、ペルシアは使い慣れた学年リーダーの口調で屁理屈を並べ立てた。

「戦術と戦略を履き違えてはいけないわ、スコット。黒犬の連中を明日で根絶やしに出来るなら弱点を突くのもありだけど、そうじゃないでしょう？ 不意打ちは高貴なる白猫の流儀ではないわ」

「しかし……」

「弱点を突く前に自分の長所を伸ばしなさい。慢心こそが一番の敵なのよ」

その敵国の色事に協力すると数十分前に言った口から、次々と出てくる建前の数々。ペルシアは軽い自己嫌悪に陥った。だがそんな彼女の気持ちなど知らぬスコットは、しばし目をパチパチとした後で大きく首を縦に振った。

「分かりました、さすがペルシア様。腑抜けた黒犬どもと同レベルに落ちることなく、自らを引き締めよと言うことですね。ではさっそく行って参ります！」

「行くって、どこに……？」

「もちろん白猫男子の引き締めにですよ。嘆かわしいことに一部の者からは、白猫内でもバレンタインなる風習を広めようと言いふら輩がいるそうですね。鉄拳制裁を食らわせてやろうかと」

「……え？」

「お任せくださいペルシア様。黒犬どもの軟弱な風習に白猫が染まらぬよう『ペルシア様の名の下に』性根をたたき直して参りますので。では失礼します！」

「ちよつ……」

晴れやかに胸を張りながら白猫寮に戻っていくスコットを、今度はペルシアの方が呆然と見送ることになった。そして自分の吐いた建前がブーメランのように自分自身に突き刺さったことに気づいたペルシアは秘かに身震いをした。

《こ……こんな空気になっちゃったら、チョコレート material を買い集めるなんて出来ないじゃない！》

そして再び時は進んで、バレンタインデー当日の昼間。ダリア学園の教室はチョコのやりとりをする黒犬の男女と、それを冷ややかに見つめる白猫の男女によって生暖かい空気が醸し出されていた。両者の間には透明の厚く堅い壁があり、黒犬の中にもモテる者モテざる者との冷たい壁があった。もつとも黒犬男子全員に『普通の義理チョコ』をせつせと配る蓮季の精力的な働きにより、後者の壁の方

は白猫に付け入られない程度には薄められていた。

肝心の犬塚はというと、例年通りモテないグループに属しているながらも（蓮季からの分はノーカン扱いされていた）最初の方は鼻の穴を膨らませて余裕綽々の表情を浮かべていた。だが授業が先に進むにつれて彼の表情には絶望と空元気が交互に現れるようになり、その落差はだんだん大きくなっていった。

理由は簡単、ペルシアが一向にチョコを渡しに来ないからである。

《分かっている、俺たちの仲は秘密だもんな。人目のあるところじゃペルシアだって渡しに来れないよな……でもあいつらの軽蔑しきった表情をみてる、バレンタインなんてスルーして当然と思われてるかも……ああいやいや、ペルシアは昨日約束してくれたんだから、俺だけは信じてやらないと……でもペルシアのやつ、その気があるなら目配せでも何でもサインを送ってくるはずだよな。それが無いってことはまさか……いやいや俺が疑ってどうする……》

疑心暗鬼を振り払おうと頭を抱える犬塚。休み時間、昼食時間、教室の移動時間……あらゆる機会を縫って犬塚は黒犬の集団を飛び出し、ペルシアが追ってくることを信じて人気の無い区画へと足を運び、チャイムギリギリになつて汗だくで教室に戻る動きを繰り返した。だがペルシアは

そんな彼に一瞥すら与えることなく、厚く堅い壁の向こうで超然たるリーダーの姿勢を崩さずに佇むばかりであった。

そしてそんな二人のことを、哀しげに見つめる一對の黒い瞳があつた……。

そして放課後。犬塚は脱兎のごとく教室を飛び出すと、ペルシアとの密会場所の一つである礼拝所へと向かった。だがまだ陽が沈むには早い時刻、授業を終えた白猫や黒犬の生徒たちが代わる代わる礼拝所を訪れてくる。そのことごとくを狂犬のような一睨みで追い返しながら犬塚は待ち続けた。しかし待望の想い人はいつまで経っても現れず……やがて犬塚の脳裏にメフィストフェレスのささやきが宿る。

《くそつ、ペルシアとサインを交わさずに礼拝所に決め打ちしたのは失敗だったか……他にあいづが来るとしたら休憩所か？ 橋の下か？ あるいは……》

もしかしたらペルシアを待たせているかもしれない。あるいは別の時間帯にここに来れば出会えるかもしれない。一度そう思ってしまったらもう止められなかった。犬塚はペルシアとの密会に使った場所へと走り、落胆する間もな

く次の場所へと走った。メッセージを書き残したいのは山々だが人目に触れるリスクを考えるとそれは出来ない。候補地が複数あり身体が一つしかない以上、網を広げて待ち続けるしかないのだった。

《ペルシア……俺、信じてるからな。今日中にどこかで会えるって信じてるからな。今日のこの日を迎えられた奇跡を思えば、走るくらい何てことないからな！》

ペルシアが教室から直接白猫寮に帰るといふ可能性を強制排除した犬塚にとつては、馬鹿げていようがあらゆる場所で待ち続ける以外の選択肢は残されていなかった。

*
*
*

やがて。陽がとつぷりと暮れ、夕食もとつくに終えた時間帯に、黒犬の制服を着た一人の女子が白猫の寮の前に現れた。

「ペルシアはどこにいる？」

敵地に単身乗り込んだ少女からリーダーの名が指名される。決闘の申し込みだと解釈した白猫の面々は、一人で個室に閉じこもっていた一年生リーダーを呼び出して玄関へと導いた。綺麗な金髪をボサボサに乱した姿を現したペルシアを見た途端、勇気ある乱入者は金切り声を上げた。

「お前、なんでこんな所にいるんだ！」

「……？」

呼び出しておいて何をいまさら、と訝しむ白猫の生徒たちに囲まれながら、ペルシアだけは自分をにらみつける黒犬の少女……蓮季の真意を感じ取った。

経緯はよく分らないが、彼女は知っている。自分が犬塚との約束を破ったことを知っている。

チョコを用意できなくて合わす顔がなかった、犬塚に謝るチャンスがなかった、なんて言い訳にもなりはしない！

「ちよつとツラ貸せ」

「……わかったわ」

「ちよ、ペルシア様、何もこんなやつとタイマン張らなくても。こんなやつ我々で十分……」

色めきだつ白猫の生徒たちを、ペルシアは片手で制止した。

「心配いらないわ。この私が犬塚の金魚のフンごときにやられると思つて？」

「し、しかし……」

頼もしげな口調とは裏腹に《この子には二・三発叩かれても仕方ない》と覚悟を決めた。ペルシアは、夜の林へと向かう蓮季の後に続いた。

林の中の休憩所。犬塚とペルシアが密会する場所の一つに蓮季はペルシアを導いた。いくら親友だからと言っても、この場所のことを犬塚が蓮季に話すとは思えない。おそらく蓮季は自力で見つけたのだ、犬塚の後を追って。

《どうして、なんて……聞くだけ野暮よね》

自分と犬塚の関係を知った蓮季が、犬塚の胸で泣きじゃくる姿をペルシアは見ている。いまさら謝って済む関係じゃないことは分かっていた。自分の非を自覚しつつも、ペルシアは憎まれ役を演じると覚悟を決めた。

「……それで、私に何の用かしら？」

「犬塚がお前を探してる」

「……ええ」

「今日がアレの日だって、知ってるんだろ？」

「……ええ」

「犬塚のことだ、お前に何を頼んだかは想像がつく。なんで逃げる？」

『逃げる』。ウエスト貴族にとつて屈辱的な決めつけをぶつけられても、ペルシアは反論の言葉を持たなかった。

「……ごめんなさい」

「謝るなあ！」

ぱつと振り返る蓮季に、叩かれると反射的に身をすくめ

た。ペルシア。だが痛撃は飛んでこなかった。恐る恐る開いた。ペルシアの瞳には、涙を一杯に溜めた蓮季の絶叫が映った。

「犬塚はずっと楽しみにしてたんだぞ、初等部でお前に出会ってから十年間ずっと、今日みたいな日が来るのを夢見てたんだぞ！ あいつを裏切るなんて蓮季が許さない！」

「十年間……？」

「そうだぞ！ 敵のお前なんか好きになって、いつもお前のことばかり追いかけて！ 一年生のリーダーになったのだって、自分以外のやつにお前を殴らせないためなんだぞ！ お前が思ってるよりずーっとずーっと、犬塚はいいヤツなんだぞ！」

ペルシアは押し黙るしかなかった。犬塚が自分のことを見ているのはライバル心ゆえだと、告白されるまでずっと思いこんでいた自分が恥ずかしくて。そしてそれだけ犬塚のことを知っている蓮季は……きつと自分の何百倍も、犬塚のことを真剣に見つめ続けていたのだろうと気づいて。「……言い訳は許さない。もうじき犬塚はここに来る。寒かろうが怖かろうが、ここであいつを待ってろ」

しゃべり過ぎたと思ったのか、照れたような口調で蓮季はそう言い放つと、ペルシアの返事を待たずに背を向けて歩き出した。そしてしばらくして振り返ると、あかんべえ

をしながらペルシアに憎まれ口を叩いた。

「お前なんか犬塚に振られちゃえ！ ばーか！」

そして。蓮季が去ってから五分もしないうちに、休憩所に犬塚が現れた。探し続けた想い人とようやく出会えた犬塚は安堵の笑みを浮かべた。

「ペルシア！ 良かった、待っててくれたんだな！ 本当

に良かった！」
彼の笑顔があまりに眩しすぎて、ペルシアは視線を逸らしてうつむくしかなかった。この人はどこまで真つ直ぐなんだろう。それに引き替え自分は……。

「……ごめんなさい」

「いや良かった。もう夜も遅いし、待たせ続けたペルシアに何かあったらと気が気じゃなかったぜ！ こんなことなら待ち合せ場所を決めとくんだったな」

「ごめんなさい。あなたに渡すチョコ……」

「え？ ああ、いいんだいいんだ。また失敗したんだろ？ お前と無事に会えたんだからそれでいいよ」

「……え？」

「走り回ってるうちに細かいことはどうでも良くなった

から！ さあ帰ろう……って、俺と一緒に白猫寮に行くのはマズいか、アハハ」

……もうダメ。私この人にハマる。

顔を上げたペルシアの瞳に、汗だくで荒い息をつく犬塚の姿が映った。長年の確執も貴族の誇りも、光り輝く彼の汗の前では全てが色あせて見えた。夢の中に居るような気分のまま、ペルシアは声を震わせてつぶやいた。

「すごい汗……」

「え？ ああ、たいしたことないって」

「拭いてあげるわ。そこに座って」

ベンチに腰を下ろした犬塚に近づいたペルシアは、手にしたハンカチを彼の首筋に当てて……

そのまま首を引き寄せて犬塚の頬にキスをした。

「えっと……ウエストでは女性から贈り物する時点で求婚と同じだから……これでチョコの代わりにして……」

一瞬で全身の血液が沸騰して幸せそうに倒れ込む犬塚に向かって、ペルシアは夢見るようにつぶやくのだった。

「こらーっ、そこまでしろなんて言った覚えないんだゾ！」
物陰から飛び出してきた蓮季の声は、月夜に照らされたカップルのどちらにも届いていなかった。

F i n .

バレンタイン様が見てる

(オリジナル)

著者…比翼連理

西暦2699年2月14日。

聖職者バレンタインは、当時禁止されていた兵士の結婚式を執り行った罪で、絞首刑に処させられたとされている。

現在に至るまで、2月14日は恋人たちの守護聖人であるバレンタインの名前をとってバレンタインデーと呼ばれている。

☆

バレンタインデーなるイベントが日本に定着してから、一体どのくらい経ったのだろうか。

貪欲なお菓子業界がどんどん新しい宣伝を打ち出していくさまを、僕はそのほかの大多数の世情に疎いボンクラどもと同じように、胡乱な目つきで眺めていたものである。興味のない振り。

それは僕らのようなアンテナの低い人間にとって、唯一の

防御策と言ってもいい。流行り廃りに、他の連中より遅れて乗っかるうとしたときほど、情けない瞬間もそうそうない。だからこそ、そんなものに興味はないんだ。なんて強がりや日常的に使ってしまう。本当はみんなの輪の中に入りたいた時だって、恐怖と意地がストップをかける。

もはや習性のように体に染み付いたそれは、きつと僕から考える機会を奪い続けてきたのだ。何年も何年も、動かない理由を探すために。

しかし僕はもう気がついてしまった。何もしないでいれば、きつと呪いのように、こいつは僕を縛るだろう。死神のようにささやき続けるだろう。やるしかないのだ。

年明けから二週間のときが過ぎようとする頃、小さなチョコレート齧りながら、僕は長年の恋に決着をつける覚悟を決めたのだった。

葛西成美のことを、まず僕は説明せねばなるまい。それは僕が恋した女の子であり、憧れの象徴であり、僕というねじれた人間がどうにか生きていく上での指針をくれた、恩人の名前である。

中学校の教室というものは、実に様々な要素が渦巻いている。そしてそれに訳もわからず翻弄されて、いつの間にか

道を踏み外してしまうこともある。大人はそれを反抗期と呼ぶ。きっと僕も遠からずそう言う日が来るだろう。しかし世の中学生は冗談ではないと口をそろえて言う。だがそれを上手く言語化できずに、結局は大人に丸め込まれてしまう。

大人を信用できなくなるのも、世界が漠然と大きなものだと知るのも、子供の自分を支えていた根拠のない万能感が消えて「いつか」という理想郷の不在を知るのも、大体の奴はこの時期だ。

閉塞感にすり減らされながら生きていた頃のことを、大人は忘れてしまう。

無理解に苦しんだ僕は、大抵の人間がそうであるように、何もかもから逃げた。

状況に適応も出来ず、心の中で誰も彼も見下して、一息できる場所を世界に求めた。

学校を抜け出して、通学路にある小さなお堂に隠しておいた釣竿を手に海まで歩き、そこで日がな一日釣り糸を垂らしたり、人の住んでいない廃屋の庭に腰を下ろして、タバコを吸いながら本を読んで過ごしたり、孤独であることを除けば不良そのものといえるそんな息抜きを、僕は月に一度か二度ほどの頻度でやっていたと思う。

それを居場所と呼んでいいのかどうかは判定に困るとこ

ろだったけれど、大人に怒られるというデメリットを加味しても、それは僕にとって価値のある時間だったように思う。

思う思うと、小学生の読書感想文のような結びばかりで申し訳ない限りなのだが、その頃の記憶は正直なところおぼろげで、思い出そうとしても輪郭ごとぼやけてしまうのだ。その後出会った葛西との思い出が強烈すぎて、思い出は感光したフィルムのように真っ黒になってしまった。

僕が覚えていると思っていることは、後に補完されたコーラージュのようなものではないか、と今では思っている。

葛西成美と話すことが増えたのは、僕が不健康で無意味な日常を、罪悪感なくこなせるようになった頃だった。

忘れもしない、中学二年生の頃、十月の晴れた日のことだ。学校からほどよく離れ、住宅地からも距離を置いた、その朽ちた廃屋の庭は、その頃の僕のお気に入り場所だった。ふらりと誰かが忍び込んでも僕の痕跡を探られないように、庭のどこにも僕がいた跡を残さないように気をつけた。ただ、父から拝借した手巻き用のタバコの葉だけは、密閉した容器をビニール袋に包んで、庭内にあるがらくたと一緒に軒下に隠しておいた。持っているところを誰かに見られたらまずい、という理由もあったけれど、それは僕にとってテリトリーの証明という役割も持っていた。ここ以外

でタバコは吸わなかったし、ここ以外に持ち出そうとも思わなかった。塀に囲まれた、誰にも見つからない忘れ去られた庭は、僕の聖域だった。

その日、学校を抜け出して私服に着替え、人目を気にしながら歩き、誰にも見つからないように忍び込んだ僕の聖域で、葛西はタバコを吸っていた。

それはなんともシュールな光景だった。

なにせ長い黒髪をポニーテールにしたブレザーの制服（僕の通う中学校の制服だ。このあたりには中学校は一つしかないのだからのだが）を着た女の子が、地べたに座布団を敷いて上品に膝をそろえて座り、折れ曲がったタバコを吸って小さく咳き込んでいたのである。

僕を見て驚いたようでもあり、慣れない煙に悪戦苦闘しているようでもあった。

咳き込む音が道行く人に聞こえてしまう可能性に怯えた僕は、慌てて隠してあった灰皿を差し出し「タバコはよしたほうがいい」と小声で言った。

慌てふためいた僕の様子がおかしかったのだろうか。彼女は咳き込みながらも口元を押さえて、苦しそうに笑って見せた。手元のタバコを消しもせずに。

心臓が高鳴る音が、確かに僕には聞こえた。

そしてようやく一息ついた彼女は、やっぱりなんだか楽し

そうに「ごめんなさい」と言った。少し枯れた声は、錆付いたステンレスみたいに不安定で純粹だった。

「勝手にあなたのもものを取っちゃってごめんなさい。実は昔から興味があったんだ。大人の人がみんなおいしそうに吸ってるから、どんな感じなのかなって」

「……美味しくはなかっただろ」

「うん、なんでこんなもの吸ってるの？」

僕は彼女に、ニコチン中毒の人間が行う奇行の必要性や、社会からの逃避というモラトリアムの意義を説くべきか、一瞬真剣に悩んだ。しかしそんなことはどうでもいいのだ。

「消極的自殺志願者の愚考については後で話そう。どうしてここに？　そしてそこに僕のタバコが隠されていることを、どうして知っているんだ？」

「だってここは、元々わたしの家だもの」

今度は僕が驚く番だった。

「住んでいたのはもうずっと前なだけだね。小学校に上がった頃だったかな。引越したけれど、まだ取り壊されていないし、売られてもないみたいだから時々ここに來てるの。住んでいた頃のことはいまあまり覚えてないけれど、やっぱりなんだか懐かしくて。そして、軒下に変なものがあるんだもん。一緒に会った紙でタバコの葉だってわかったから、どんな不良がここに來てるんだらうって思っ

たの。それで」

ピッと、彼女は僕を指差した。つまり見られていたわけだ。ダラダラと孤独に、現実から逃げる僕の姿を。走って逃げてしまおうかと思った。急にいろんなことが恥ずかしく思えてきた。何よりも、彼女に指を指された瞬間に、一連の行動を今の今まで心のどこかで格好いと思っていた自分に気がつかされたのが、一番恥ずかしくなかった。

それを見透かされたのではないかと勘ぐるものなら、もはや地獄の責め苦のほうがまだマシに思えるほどである。僕に出来たのは、虚勢を張ることだけだった。

「それで、こんなひ弱そうな奴なら、追い出すのも簡単だろうと思っただけか」

「ううん、違うよ。友達になれそうだなって、そう思ったの」

そう言って、彼女は灰皿を指差した。

「一人で不良になりたがるのは、君だけじゃないんだよ。でもどうせなら、友達が欲しいの。悪いことをするとき、安心させてくれる人がね」

なんともまあ。

僕も正直驚いていた。そんなことを考える女の子が、まさかこんなに近くにいたなんて。

逃げ出すこと。距離を置くこと。僕が求めていたのはま

さしくそれだ。しかし長い時間を一人で過ごしていて、焦りや寂しさに襲われることがないかといえは、そんなことはない。むしろ僕の唯一の課題は、その感情をいかに無視できるかということだけだと言ってもいい。

「同感だよ。放課後までじっとしておくのは、一人だと長すぎる。……僕のことにはばれているみたいだし、拒否するのは得策じゃないみたいだね」

「そうそう、だから」

「ただ、友達というのはうまくない。とりあえず一緒にいて、会えば話すというだけで友達なんて言うのは、なんだか間違っている気がするんだ。僕は友達にもお話し期間が必要だと思ってる。結婚における恋人同士の時間みたいに。——だからさ、君と僕とで同盟を結ばないか？」

「同盟？」

思い出すと顔から火が出そうな事実なのだが、このとき僕はこれ以上なくらい浮かれていた。降って湧いたような理解者の出現は、それほどに嬉しいものだったのだ。ともかく、ノリに乗った僕はこう続けた。

「そう、同盟。寂しさを埋めるために、お互いの利益になる関係を築くための条約を結ぶんだ。友達になるのは、気が合う友人になれると僕らが二人とも確信したとき。おべっかを使う必要もないし、友達じゃないから離れたって気

に病むこともない」

「お互いの利益を追求するから、同盟なんだね」

饒舌な僕の様子に面食らいながらも、彼女はそう言った。

「その通り」

会話を急ぐように、僕もそう返した。

思い返すと、その場で逃げられてもおかしくないやり取りだったと思う。実際、現実にあの頃の僕のようなテンションの人間と出会ったら、今の僕なら五分以内にそこから角を立てずに離れる方策を探る。

しかし葛西ときたら豪胆なもので、怪しい中学生以外の何者でもなかった僕に対して、了承の意を示しただけではなく、こんな提案をしたのである。

「それでは、同盟をーけつを祝うために、祝杯を挙げましょう」

カバンから出てきたのは、魔法瓶入りのコーヒーだった。彼女はスティック入りの砂糖を二つと、クリープを一つ。格好付けた僕はブラック。

ぶつけた紙コップが立てた小さな音が、僕らにとっての祝砲だった。

「私、葛西成美っていうの。よろしくね。高橋晶君」

僕の名前は既に知られていた。小さな中学校だったから、全員の名前を把握していたっておかしくはない。僕は自分のクラスだけで精一杯だったけれど。

そんなことよりも、彼女の口から発せられたタカハシアキラ、という響きが、自分の名前だとは思えないくらい澄んだ印象を持っていたことが、当時の僕には驚きだった。

その日から僕らの不良行為が回数を増したかというところ、特段そういうことはなかった。むしろその逆だ。

結局のところ、僕らが求めていたのは居場所だったのだ。墮落した秘密を共有する同盟者を得た僕らにとって、形ばかりの逃避行は、気が向いたときの趣味程度にまで価値を落としてしまっていた。

増えたのは放課後の予定だ。

終業のホームルームを終えると、僕らはひたすら走る陸上部ややけっぱちな掛け声を上げる野球部を、グラウンド脇の階段に座って見学したり、ガラガラの図書室の机に向かい合って座り、静かに本を読んで過ごした。

会話は、予想していたよりもずっと弾んだ。

漫画と適当な現代小説ばかり読んでいた僕が、古典などという退屈なものを読み始めたのも、彼女の影響である。

と言つても押し付けられたわけではなくて、僕がなんとか話についていこうと勝手に努力した結果なのだが、結果として僕の読書量は格段に増えた。モチベーション自体が上がったのである。

高校で文芸部に入ったのも、その名残といえる。本を読み出したきっかけを聞かれても、女の子の気を引くために色々な本を読みました。なんてことを軽々しく言えるほど、当時の僕は彼女のことを割り切れてもいないし、純情な高校生だったので、理由を聞かれてもどうにかはぐらかしていたのだが。

話を戻そう。

お察しの通り、僕らの進学先は同じ高校ではなかった。学力の差はそこまで開いてはいなかったけれど、ただなんとなく違った。

二人でいるときに、進路の話の一つでもしていれば、結果は違ったかもしれない。ただ当時の僕らは一年後の自分がどうしているのかなんてことはまったく気にもしていません。たとえ考えたとしても「よくわからない」とおどけてなんとか笑おうとしていたものだった。

さらに言えば、きつと僕は、そして彼女も、呆れるくらいに楽観的だったのだ。

違う学校に通うことになつたとしても、僕らの関係が消

失することは無いと思つていた。

出来ることなら、問いただしてやりたいものである。「君たちは友達ですらないのに、そんな絆に力があるとでも思つているのか？」と。

些か、意地悪な言い方かもしれないけれど。

最初にそれが気がついたのは、葛西の方だったのだろうと思う。

「晶君。私たちは、もう友達なのかな？」

やけに思いつめたような声だった。

年が明けて進路が決まり（授業を度々抜け出していた僕らには推薦入学なんて到底無理で、きちんと二人で受験勉強をしたものである）、卒業までいくばくかの時間を残すばかりになつた、冬真つ盛りの頃のことだ。

その日僕らは、二足歩行に成功した雪だるまみたいに大量に服を着込んで、風の凪いだ海沿いの埠頭に腰を下ろしていた。

釣り糸を垂らして水面を睨んでいた僕は、それまで手袋をはめた手でもどかしげに本のページをめくつていた葛西が、本を閉じてこちらに向き直つたことに気がついていなかった。

「……どうだろうね」

友達だ、と言いたかった。気障な表現で親友だと伝えただけで良かった。

直前で怖気づいたのは、僕らの関係を友達という言葉で定義した瞬間から、それは酷く息苦しいものに変わってしまったのではないか、という不安に気がついたからである。もうすぐ気軽に会えなくなるという事実、僕自身時々不安になっていた頃でもあった。

曖昧な関係の心地よさに、取り返しをつかなくとも浸りすぎたのかもしれない。

気まずさを覆い隠すように、僕はこう続けた。

「同盟という関係のほうが、僕らにとっては都合が良いんじゃないか。って、実を言うと考えてる。何せ」

「一方的に破棄出来るから？」

遮るような葛西の声は、凍りついた太陽みたいだった。「違う」

そら恐ろしい恐怖に押し出されたそんな言葉は、先が続かなかった。

慌てて振り返った先には、澁刺とした普段の彼女らしくない、泣き出す寸前みたいな表情があった。初めて見たそんな顔に、僕は全ての言葉を失った。

何かを言おうとしても、どうしても、曖昧なそれを上手

く言葉に出来なかった。

彼女もまた、何も言わなかった。

立ち上がって「今日は帰る」と言っただけだ。

卒業の日が来ても、僕らが意味のある会話をすることはなかった。

明確な別れを恐れて行動しなかったことを、僕は悔やんだ。

携帯電話は高校入学と同時に買ってもらった。

だから気軽に連絡を取ることが、その頃の僕には出来なかった。だけど、きつとあつても大して変わらなかつたと思う。

葛西との思い出はまったく更新されないまま、僕は地元から少し離れた高校に進学した。僕は孤独を愛する一人の子供に戻り、しかし彼女のことを完全に忘れ去ることも出来ないまま、連絡を取る勇氣も出せないまま、不器用に何人かの友達を作った。

もう同盟を持ちかけることはなかった。最初から、友達の前段階のお試し期間などではなかったのだ。気の合う誰かにかける、冗談の延長線上にある何かでしかなかった。

しかし葛西と別れてからは、少しだけ形を変えた。

それは心の奥深くに根付いて癒着して、もはや引き剥がしようのない聖域だ。立て看板の存在さえ、葛西以外の誰かに見られたくはなかった。

大学生になった僕はさらに地元を離れ、念願の一人暮らしを始めた。

毎日が忙しくて慣れないことばかりで、自分のことだけで手一杯。そんな日々のおかげで、僕は少しだけ後悔を忘れられた。

地元に帰りたくはなかった。移動も面倒だし、仲のいい連中などほとんどいないに等しい。もうどこにいるかもわからないけれど、葛西に偶然出会ってしまうのも、情けない話だが怖かった。その頃にはもう、彼女は僕のことなど忘れたと思っていたし、それが現実になる瞬間など想像するだけでも身がすくんだ。ただ美しい思い出の一かけらであつてくれれば、それでよかつたのだ。

しかしいくら僕が帰郷を拒もうとも、正月ともなれば親からの催促を断るのも難しくなる。仕方なしに僕は電車に乗り、大晦日の日暮れには実家に帰りついた。出かけるような用事を言い渡されなかったための、ささやかな予防策である。久しぶりに母の蕎麦をすすり、紅白をなんとなくに見て、何事もなく年は明けた。

事件が起きたのは翌朝のことだ。

生まれて初めて、僕は葛西成美から年賀状をもらった。

今年、僕は二十歳を迎える。

それはつまり成人式に参加できるということと、参加の誘いが来ているということだ。出欠の有無を確認する手紙をもらった気もするが、なんとも不精なもので僕は葛西の年賀状に書かれていた「あけましておめでとうございませう。中々便りを書けずに申し訳ありません。成人式には来られますか？」という文章を見るまで、そんなことはすっかり忘れていた。

どこにも行くことができなのまま、なんとか葛西のお陰で呼吸をしていたあの頃から、もう五年。五年ぶりに見た彼女からのメッセージに、驚かないはずがなかった。

時間はほとんどなかった。なにせ成人式が行われるのは一月十日だ。

母に参加することをどこに伝えればいいのかを聞いて（というより連絡を頼み）、年賀状の返事を書いた。年賀状なんでものを書くのは小学生の頃以来で、あけましておめでとうの先に何か書くべきかたっぷり一時間は悩んだと思う。そして一月十日。

ロクに場所も覚えていない文化会館で、僕は成人を迎えた同級生たちと再会した。

クラスで浮いた存在だった僕だけれど、みんなの反応は想像していたよりもずっと優しく、ひどく拍子抜けしたものである。とはいえその優しさが表面上のものでしかないのは、いくら僕でもすぐに気づいた。

僕に限った話ではなく、一部のグループを除いて、ひどくよそよそしい空気が蔓延していた。久しぶりの再会を喜ぶ者はもちろんたくさんいたけれど、それでも長い断絶を埋めるには、まだ時間が足りないのだ。子供のように振舞えるほど僕らは純真ではなかったし、打算に身を任せてアルコールに頼るには若すぎる。

形ばかりの飾り付けをした待合室に、葛西の姿は見当たらなかった。

僕は怖かった。彼女との再会が、周囲の光景のように風によそよそしい、流砂に怯えながら砂漠で手を伸ばしあうような痛々しさを伴うのではないかと思うと、腹の底に氷塊を抱え込んだような寒気に襲われた。

「どこ行くんだよ。高橋」

待合室を出ようとすると、扉の近くにいた見覚えのある男に呼び止められた。派手な金髪と仰々しい袴に反して、顔立ちはまだどこか幼い、左脳に浮かびかけた名前を手繰

り寄せながら、それを悟られないように返答する。

「まだ時間はあるだろ？ ちよつと出歩いてくるだけだよ」

返事を待たずに部屋を出て、特に当てもなく歩いた。

薄暗い廊下には、僕が通っていた小学校、中学校の生徒が書いた書初めや絵が壁に貼り付けられ、なんとなく笑いを誘った。

数えるほどしか、ここには来なかったと思う。その数少ない記憶の一つは、確か小学生の頃だった。絵がそれほど得意ではなかった僕が半ばやけくそで描いた、きつと生涯最高の一枚が、こんな風にここに展示されていたのだ。思っていたよりもずっと上手く描けて、密かに自画自賛していた僕の内心を見破ったのか、担任の先生は大げさなくらいに褒めてくれた。それを母に自慢したくて、ここまで車で連れてきてもらったのだ。

どんな絵かは、もう忘れてしまった。

大きな木だったような気もするし、校庭のサッカーゴールだった気もする。誰かの似顔絵ではなかったのは確かだけども。

『ちよつともつたいないね。せつかく上手く描けたのに』
残念そうな彼女の声を、ふと思いついた。そうだ、話したんだ。親が関わる話なんて恥ずかしくて出来なかったの

に、葛西にだけは本当に何でも話してしまった。話題にさえなれば恥ずかしがるのが汚点だろうが何でも良かったんだ。

その会話はこんな風に続いた。

『探せば押入れに眠っているかもしれないけど、今見たら、多分大したものじゃないと思うんだ。所詮は、小学生がまぐれで描いたものだからね』

『それから絵を趣味にしようとは思わなかったの？ 退屈だっけ？』

『描いてたよ。でもすぐに飽きた。全然思ったように描けなくて、挫折しちゃったんだ』

『継続は力なり。だよ』

『葛西。そんな言葉は机上の空論だっけ、前に言ってなかったっけ？』

『わたしにはそうだけど、君にもそれが当てはまるとは限らないでしょ』

『暴論だ……』

暴論だと思った。

僕は頑張ることに疲れて、一直線のレールから飛び降りることを選んだのだから。

継続は力なり。だっけ？ その言葉を口にした人間のうち、たゆまぬ継続を成し遂げてきた者がどれだけいるか。きっと

と恐ろしく少ないはずだ。自分が実践していないことを、他人に強要するなんておかしいじゃないか。そんなことを、彼女と口々に話し合った（思えばこれも酷い偏見である。若気の至りだと思つて見逃して欲しい）。

おどけた態度も相まって、僕は彼女の言葉を冗談だと思つていたし、今の今までその印象は変わっていない。

だけど、

「どの辺に飾つてあつたの？」

ふと、後ろから声をかけられた。

それは記憶の中にな言葉だ。幻聴でもない。

実を言うと、もつと驚くと思つていた。あるいは、もつと色々な感情が、僕の制御を離れて暴れまわると。

だけど、振り返つた僕の胸には、不思議と懐かしさと愛

おしさ以外の感情は何一つとして湧かなかつた。もしかしたら存在しているのかもしれないけれど、僕自身気がつか

ないうちに押し流されてしまったのかもしれない。

5年ぶりに見る葛西成美の姿は、僕の想像とほとんど変わ

わらない、澁刺とした少女の延長線上にあつた。そのくせ

なんだかいつも寂しげで、ティーンエイジャーの不安定さ

から脱却しようともがいてるようで、見ていてハラハラ

してしまふ、溶けかけて表面が濡れた氷細工のような喋り

方をする女の子。

目立たない淡い色の晴れ着を着ているのに、人目を惹かずにはいられない妙な凄みがあった。僕の想像と違っていたところがあつたとすれば、髪が少し短かつたくらいである。

意識するでもなく、頬が緩んでいたのが自分でわかつた。抱きしめて再会を喜びたいところだつたけれど、日本を出たことのない僕にそんな欧米のスキンシップは気恥ずかしすぎた。

「忘れちゃつたよ。何を描いたのかも、昔以上に曖昧だし。というか、よく覚えてたね」

「君は私と話したこと忘れちゃつたの？ 酷いなあ」

「そう苛めないでくれよ。……僕も覚えてたさ。あの頃は本当に楽しかつた」

「うん、私も、ずつと、連絡しなかつたこと後悔してたんだけだ。だけど勇気を出して良かった。きっと、年賀状がなかつたら来なかつたでしょ？」

その通りだ、と僕は肯定した。

葛西は笑つた。

つられて僕も笑つた。

それからいくらかの世間話をしたけれど、僕らはお互いに知らない場所で成長したとは思えないくらい、息がぴったりと合つた。

無理なんてしてなかつた。時間が作り出した断絶どころか、僕らの間には小さなひび割れも見当たらない。

似たもの同士、同盟関係、かつての不良仲間、言い方は色々あるだろうけれど、僕らを繋ぎ続けてきた関係を、言葉にしてしまうのはもつたくなかつた。

「ねえ葛西」

切り出すならこちらからだ。

僕はそう思った。

彼女はもう、こちらに手を伸ばしたのだ。一枚の葉書を使つて。

「僕らは友達でいられるのかな」

僕が葛西への恋心を自覚したのは、その日のことだ。

成人式なんて抜け出してラーメンでも食べに行こうかと思つたけれど、誘うのは止めた。

子供みたいな逃避はもう十分すぎるくらいにやつたことだし、なんとと言っても今日は僕らが大人として認められる日なのだから。

そして少しだけ時間が経つて、バレンタインがやつてきた。

葛西に恋人がいらないことは聞いていた。だからこの日、僕は待ち合わせて遊びに行く約束を取り付けていたのだ。

「デートみたいだね」と葛西は言った。笑って誤魔化しておいたけれど、僕は今日の予定をデートに変える気でいた。昨日用意しておいたチョコレートと、包装が崩れないように慎重な手つきでカバンに詰める。僕から彼女に送るのは世間的におかしい。なんて文句は通用しないと思っただけだ。義理チョコ逆チョコ友チョコ、渡す理由が何かにつけて増えているのが世間様の現実だ。製菓会社と広告代理店のお墨付き。これに文句をつけるだなんてとんでもない。

この甘いミルクチョコレートを葛西に渡し、同時に告白する。ただそれだけだ。何も難しいことはない。それでも不安はある。

しかしそれは、かつて乗り越えた峠だ。丸々と着膨れした雪だるま同士で、情けないやり取りを晒したあの日、彼女の言葉をはぐらかしたときと、状況は変わらない。もうそんな間違いは二度と犯さないと決めたのだ。もし拒まれても、それはそれで構わない。僕は彼女が好きなんだ。その気持ちに嘘をつき続けることは、出来そうにない。

僕が住む町と彼女の住む町は、そう遠くもないけれど近くもなかった。会うには電車で一時間も揺らされていればいい。

電車で一時間、今では簡単だけれど、あの頃はひどく遠い距離に思えたはずだ。お金が必要な交通手段のほとんどを僕は漠然と怖がったし、そもそも僕らの町に駅はなかった。荷物の準備を終え、時間を確認する。まだ余裕があった。僕は暖房を入れて寝間着を脱ぎ、外出のために着替えることにした。

シャツを手にしたところで、スマートフォンが鳴った。着信音はデヴィッド・サンボーンのザ・ドリーム。極めつけに叙情的なアルトサクスの音源を、崩れた本のタワーから発掘し、どこからの電話なのかを確認すると、なんと母からである。

僕は少々うんざりしてしまう。母のことが特に嫌いというわけではないが、ここ最近は何を持って余しているのか、特に意味のない会話を長々としたがるのである。無視しようかとも思ったが、何か危急の用件ではないとも言い切れない。

「晶、今日は何か予定あるの？」
最初に飛び出したのがそんな言葉だ。大した用件ではないことが、僕にはすぐにわかってしまった。

「……友達と遊びに行くよ」

「あんた今日何の日だか知ってるの？ バレンタインだよバレンタイン。そんな色気のない一日にしているのかい？」

これは面倒なパターンだな……。

長話がすぎて遅刻ということもないだろうが、時間が惜しいので着替えを優先することにした。

スピーカーをオンにして机に置き、すぐそばのクローゼットを開ける。

「なんだっていいだろ。みんながみんな恋人がいるわけじゃないんだ。僕には僕なりのペースってもんがある。ほっといてくれよ」

「あんたまたそんな言葉遣いして！ 僕だなんて二十歳にもなつてまだ言ってるの？ いい加減女の子らしくないなさい！」

しまった……。

スピーカーから響く母の声はひどくざらついていて、その怒りを増幅させているかのようだった。僕は小さなクローゼットの中から最近買ったばかりのスカートを取り出し「今日は久しぶりにスカートを履いて出かけるんだよ」と猫を被れば、母は男子高校生じみた僕の言葉遣いへの怒りを瞬く間に鎮めてくれはしないだろうか、ともすれば

現実逃避のように思考を滑らせる。

「……普段はちゃんと女の子らしくしてるよ。服装も」

「嘘おっしゃい。この前帰ってきたときはジーンズだったじゃないの」

「今日はスカートを履いてくさ」

「ファッションをとにかくは言わないけどね。せつかく私に似て顔はいいんだから、普段から女の子らしくしとけば、いい男の一人や二人すぐ出来るのよ。そうすれば寂しいバレンタインを過ごす事だって……」

もういい。

「待ち合わせに遅れるから、もう切るよ」

いい加減鬱陶しくなった僕は通話終了のボタンを押し、手にしていたチェック柄のスカートに脚を通した。なんだかアニメに出てくる制服のスカートみたいだったけれど、持ち合わせの服とも合うし、何より可愛い。

姿見で確認してみても、線の細い僕にはそれなりに似合っていると思う。普段の服と印象が違いすぎるような気もしたけれど、まあ悪くはあるまい。欲を言えば、もう少し髪は長いほうが良かっただろうか。髪を長くすると洗うのが面倒なので、僕はいつも肩に届かない程度のショートカットにしているのだ。

僕だって別に可愛らしい、女の子らしい格好をすること

が嫌ではないのだ。女性としての自覚もある。ただ動きやすい服装が好きで、ただ女の子を好きになっただけ。

しかしこの言葉遣いは実際のところ困りもので、僕は華の女子高生時代であっても、私服のときには性別を間違えられることがあった。ついでに言えば中学生にも間違えられた。体の起伏が出ない服を着ていると、声変わり前の男子に見えなくもないのだそう。一番の原因は言葉遣いだろうが、当時の僕はいちいちショックを受けていたものがある。

お陰で葛西は、今でも僕のことを「晶君」と呼ぶ。「初めて見たとき、君のことを男の子だと思ったんだよ」とのことだが、彼女と初めて話したとき、僕は由緒正しい女子中学生らしく制服を着ていた。気が動転していたとはいえない話だ。これからはもつと、女の子らしく生きようと思う。

鏡の前で服装を整え終えた僕は、テーブルに散らかっていたノートや辞書を片付ける。出かける前に、少し整理をしておこうかと思ったのだ。

ふと、葛西が言っていたことを思い出す。

彼女は今、国立の大学で弁護士になるための勉強をしているらしい。

驚きはしなかった。彼女は本質的には真面目な人間だし、

目標を持ったなら、そこに向かう努力を惜しまないだろうと、そう思っていたから。

ただ、自堕落に日々を消費していた自分と比べると、なんだか少し悔しかったのも事実だ。僕はまだ将来何をしたいのかもはっきり決まっていなくて、段々と膨れ上がっていく焦りを忘れようと必死だった。

『晶君がどうしているのか、いつも考えてたんだ。そうしたら、もう少しだけ頑張ろうって気になるから』
嘘偽りのない言葉だろうからこそ、胸に痛い。

彼女のことを思い出し押しやった僕と違って、彼女は僕のことを支えにして、努力を重ねたのだ。

劣等感はおくびにも出さずに、僕も少しずつ頑張ることにした。

僕らは驚くほどウマのあった似たもの同士だから、どちらかが何かを為し遂げようとしていると思えば、自分もそのやる気に引っ張られて、何かに打ち込めるのだ。

今はもう遠いあの日、彼女が、僕の枯れ果てた絵への情熱に対して放った言葉の真意は、きっとこれだ。理由が欲しかったんだ。自分が前に進むための、力になってくれる理由が。

彼女は架空の僕に対して、それを求めた。僕は現実の彼女に対して、自信を求めることが出来る。

ひとまずは勉強。

そして、忙しさと自堕落に枯らされた僕の趣味の一つを、また蘇らせること。

気まぐれに設定もめっちゃくちゃな短編小説を書いていた、元文芸部員としての昔取った杵柄というべきか、僕は最近、長い小説を書き始めようかと思っている。

そしてスケッチブックと鉛筆で、幼い頃の絵への興味を思い出しながら、模写やスケッチも始めた。

今や誰でも、ネットで作品を発表できる世の中だ。ライトノベルみたいな挿絵はいらない。ただ冒頭と結びに、一枚ずつ絵を載せたい。未熟でも構わないから、読んだ人へのインパクトになるようなものを。ちっぽけな僕のことを、少しでも多く知ってもらえるように。

またやる気が湧いてきたけれど、流石に今から書いていたら、待ち合わせに遅れてしまう。

今の僕が考えるべきは、まだヒロインの名前しか決まっていない小説のことではない。

告白の成功。ただそれだけだ。

コートを羽織って携帯と財布を確認し、カバンを手にとつて、僕は玄関を開けた。

雪の予感さえ感じ取れないくらいに空は晴れ渡っていて、

そのくせやけに寒い。ストッキング越しに冷気が脚を撫で、背筋まで寒気が上ってくるようだ。

まあ天候が悪いよりはずっといい。雨が降る気配さえなければ、それで上出来だ。

雲一つない空を見ていると、僕はクリスマスチャンでもなくせに、ふと祈ってみたくなった。

兵士の結婚式を執り行つて処刑された、恋人たちの守護聖人。

彼の時代において、同性愛は禁忌だった。

しかし今では同性同士の恋愛に寛容な宗派も数多いと聞くと、同性愛者のキリスト教徒も数え切れないくらいいる。そんな時代だ。

僕らを祝福してくれたとしても、きっと天国で首をくぐられはしまい。

だから不信心なりに、僕は祈る。どうか、勇氣と祝福を。

不届きな祈りが、天に届いたかどうかは、神様にもわからない。

ただ僕は、ふと胸に湧いた暖かなそれに身を任せて、一歩を踏み出した。

今日という日がハッピーエンドで終わるような、そんなと

てつもなく、幸せな予感に。

★

初めて晶君を見たのは、中学2年生の夏のことだった。夏休みが終わりに近づいて、そのくせ蟬の鳴き声はどんどん激しくなっていく、うんざりするようななんでもない一日。

その頃の私はいわゆるいじめられっ子というやつで、集団の気まぐれで選ばれるような、不幸な生贄の座から逃げ出すことも出来ず、かといって相談して救い出してもらおうことも、考えただけで惨めな気持ちになっってしまったて実行出来ない、弱虫な女の子だった。

夏休みが明ければ、また何か違ってくるのかも知れない。というよりも、二期期に入って何かしらのアクションを起こさないと、私に未来はない。うんざりするような女子グループ特有の雰囲気肩まで浸かって生きていた私には、そこが最終防衛ラインだということくらい、本能でわかっていた。そこを過ぎてしまえば、私の評価はけなしても苛めても逆らわない羊のまま、永遠に固定されてしまうだろう。牙を抜かれた家畜のように、息苦しいまま卒業のその日まで、いや、あるいはその後も虐げられていくのだ。

今にも倒れそうなほど蒸し暑い日だというのに、考えただけで背筋が凍るようだった。惨めで死んでしまいたくなるような、あの気持ち。夏休みに入ってから忘れようとしてきたのに、あんな日々がまた来るのかと思うとぞつとすること。こんなとき、わたしは昔住んでいた家の庭に忍び込む。もう引越して10年近く経とうとしているはずなのに、日々朽ちていくまま、取り壊されることも改修されることもないまま、誰からも忘れ去られたかのように存在し続ける廃屋。

庭にある大きな木の根元がわたしのお気に入り、座布団を持ち込んでそこに座り、車の排気音や蟬の声を聞きながら本を読んで、この家と同じように、全てから忘れ去られる日待つつ。

ここから出たらそこが平行世界で、苛めの標的にされる前のように、笑って過ごせる日々を取り戻す妄想をしたり、この瞬間に世界が終わることを祈ったりする。虚しい遊びだ。だけど、誰かを誘って遊ぶことが怖くて仕方なかった私にとって、これが唯一の憂さ晴らしだ。責められるいわれはない。

そんなときだった。蒸し暑さにも負けない強い眠気を感じて、帰ることを考え始めた頃、誰かの足音が聞こえた。不動産の管理人かもしれない。一度見つかってこっぴどく怒

られてから、私は侵入者の存在には敏感になっていた。すぐに座布団と文庫本を持って、見つからないように家の裏手まで走る。

それからたつぷり三十分はそこにいたと思う。エアコンの室外機の隣に座って、少しうるさい心臓の音に邪魔されながら、耳を澄ました。予想通りその人物はこの家に用があるらしくて、私の特等席から少し離れたところに腰を下ろし、何故かそこからずっと動かなかった。

不審に思いながら、私は忍び足でどうにかその人物が見える位置に移動。見つからないよう慎重に、その人の姿を確認した。不動産の管理人でも、迷い込んだカップルでもなかった。

言わなくたってわかると思う。その人物が晶君だった。無用心にもイヤホンを耳に差して、日陰で気持ち良さそうによれたタバコをくわえ、小さな鼻歌を歌っていた。細められた目はどこか物憂げに見えて、女の子みたいに綺麗な顔立ちをしているのに、どこか粗雑な雰囲気があった。

正直に告白すると、私はその人のことを男の子だと思った。同級生だったとはいえ、男の子の顔なんてあんまり覚えていなかったし、何よりその佇まいは浮世離れた少年以外の何者でもなかった。

だから、そう、きっと、心が弱っていたんだと思う。

現実離れたその姿に、私は人目で心を奪われた。何の根拠もなく、彼ならば私を助け出してくれるときえ思った。そう、メルヘンにもほどがある理由だけれど、私は晶君に一目ぼれをしたのだ。

もう6年も前のことを思い出しながら、私は人ごみの中を歩く。

この町には、地元の田舎にはないものがたくさんある。だけれど海がないことと、夜に星空を見られないことは、大きなマイナスだ。あの頃見た景色の美しさは、きっと美化された思い出のせいだけではあるまい。

あの廃屋もそうだ。私たちの足が遠のいてからしばらくして、ようやく役目を終えたかのように取り壊されてしまった。今では寂しい更地になっていて、まだあの近くを通るときに平常心ではいられない。

結局、二学期が始まっても状況はそんなに変わらなくて、晶君に話しかけるまで私は孤独なままだった。アクションを起こそうにも、一目ぼれした男の子が女子の制服を着ているのを見た後では、気力が湧かないのも仕方ないことだと思う。けれど、私がそれを気にしたことはなかった。気にしなかった、ということにした。

何にせよ、私の関心は煩わしい人間関係よりも、孤高を貫く女の子に向いていたからだ。それを本人は苦笑いして否定したけれど、晶君は私にとって憧れで、ヒーローの象徴みたいな人だったのだ。

だから、見つからないように影から彼女を見ていた。学校を抜け出すところを見て、先回りして謎めいた女の子を演出してみたりした。

嬉しい誤算だったのは、そんな風に授業を抜け出しているうちに、私を取り巻く環境は、なし崩しの悪意から、消極的な無視という方向に切り替わっていったという点だろう。

半ば変人扱いの女の子と一緒にいるうちに、私も変人として認定されてしまったわけだ。

思い出し笑いが浮かびそうになって、マフラーで口元を覆った。

道行く女が一人で笑っていたら、変な人だと思われてしまう。

いや、マイノリティという意味では、私は立派な変人なのだ。

だって、今に至るまで、私は彼女のことを、ずっと好きだったのだから。

別に結ばれたいというわけじゃない。ないけれど、それで

もそばにいたい。長い間、不安で壊した関係を思っただけで苦しかった。

今はただ、それを埋めたいだけなのだ。恋人じゃなくても、友達でもいい。ただこんなにも波長の合う人と、離れ離れでいるなんて耐えられない。

——ダメだなあ。

苦しい気持ちも、表に出してはいけない。無理をしたら、彼女はきつと気づいてしまうはずだから。

私はただ、晶君の最高の友達でいらればそれでいい。心に刻むように、思う。

待ち合わせの場所までまだまだ遠い。私は表情を隠す練習をしながら、ゆっくりと歩いた。

もしも全てを知る神様がいたら、私を笑うだろうか、怒るだろうか。

どうでもいいって放っておいてくれたら、それが一番助かるのだけだ。

酷く寒いくせに、空は気持ち良く晴れていた。ドラマチックに雪が降る可能性は、どうやら低いようだ。

会話のシュミレーションをしながら、私は歩く。

どこかで誰かが微笑んだ気がした。

きっと錯覚だろうと思う。

それでもなんとなく、わたしは足を止めて、空を見た。

今日がいい日になりますように。

そう祈ってみた。

著者あとがき

【どうふんさん】

(あとがき辞退)

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。合同本刊行おめでとうございます。

今回もなんとか参加に至る事が出来ました。

ここ最近の合同本ではアリスちゃん同士の交流を一番に考えて書かせて頂いており、今回も例に漏れずきんモザのアリスちゃんに出してもらいました。

果たしてバレンタイン本番のアリスちゃんはシノへのプレゼントができるのかどうか、皆様のご想像にお任せする次第でございます。

それでは、皆様ありがとうございます。

【双剣士】

ご無沙汰しております。二〇一五年はどうとう一本もSSを書かずに終わってしまった双剣士です。

イラストの練習に時間を割くあまりSSを考える余裕が得られなくなった二〇一四年を反省し、一年間イラストを封印してSS描きに専念するぞーと意気込んでみたものの、結果はみなさんご存知の通り。

止まり木管理人としての私しか知らない読者の方には違和感あるかも知れませんが、実は悔いの残る二〇一五年でした。

ということでも年が明けて早々に企画したバレンティン合同本で復活の狼煙を上げるとは私の中では確定事項だったのですが、気が付くと「ハヤテのごとく！」とは違う原作ネタになってしまいました。

別にハヤテSS書きをやめるつもりはないのですが、七年近くハヤテキャラを脳内に住まわせていた私にとって、これは新境地を開拓する良いきっかけになったのかもしれないな。これを機に妄想爆発が戻ってくるといいな。

本作を読んで原作に興味を持たれた方は、公式サイトで第一話をご覧ください。

最後に一言。蓮季たんラブリー!!

【比翼連理さん】

書く前に Wikipedia なんかを漁っていて知ったのですが、聖バレンティン(ヴァレンティヌス)という人物は、どうも実在が怪しいのだそうです。彼への敬意を表して、殉教の日をバレンティンデーと定めたのもずっと後のことで、架空の人物の可能性が大きいのだとか。ロマンのない話です。

こういう話を聞いた時、わたしは基本的に「まあ愛なんて実在が怪しいものだからね、恋人たちの守護聖人には相応しいんじゃない？」なんてことをドヤ顔で言っただけで軽蔑の目つきで見られるような人間なのですが、いざそれを創作に使う段階になると残念に思うのだから、なんとも勝手なものです。

私、比翼連理は、今回初めて合同本に参加させていただきました。発表になる日が楽しみです。

再読させるような話を書こう。と思って書き始めた話ですので、このお話を読んだ方が、もう一度ページを戻して読んでくださったなら、そして楽しんでいただけたなら、これに勝る喜びはございません。

それでは、どうもありがとうございました。

編集後記

春樹咲良さん提唱による、希望者が全員参加できる合同本企画の4回目です。昨年十一月の第8回合同本で一人のクイズ入賞者が「ハヤテのごとく！2次創作でないとダメですか？」と聞いてきたことを受けて、今回は管理人自らがハヤテSSを書かないことを事前予告することでクイズ合同本とは全く違う色合いの作品集を目指してみました。

残念ながら投稿を予定しながら間に合わなかった方も幾人かいたようですが（専用掲示板にタイトルのみ投稿されたFFさんもその一人）、それでも今回初参加の方が2名投稿してくれたということ、一定の成果は出せたかなと思っております。確か比翼連理さんは誰かにOCRしてもらわないと長文投稿できない環境じゃなかったっけ？この企画を機に本気を出せる環境を整えてくれたんだったら嬉しいですね。

さて順調にいけば五月と十一月はクイズ大会とハヤテ合同本、そして二月と八月に有志合同本のタイミングが巡ってきます。去年の八月は管理人主催のイラスト合同本をやりましたが、今年はぜひぜひ春木咲良さんの志を継ぐ新たな企画主催者が手を挙げてくれることを期待しています！（合同本の編集作業、一度はやってみませんか？）

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・バレンタイン合同小説本2016

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2016年2月14日